

ステロイド性骨粗鬆症の簡易スクリーニング法に関する研究

研究分担者 曾根照喜 川崎医科大学放射線核医学 教授

研究要旨：年齢とステロイド投与量の情報のみを用いてステロイド使用患者から薬物療法が推奨される症例を抽出する簡易スクリーニング法について、その有効性を検討した。検討の結果、骨密度が測定されていない患者が多い現状では簡易スクリーニング法でも一定の有効性が期待できるものと思われた。

A. 研究目的

ステロイド性骨粗鬆症は骨折リスクが高いため適切な予防・治療が望まれる。わが国のガイドラインでは既存骨折、年齢、ステロイド投与量、腰椎骨密度からスコアリングを行い、3点以上に対して薬物療法が推奨されている。ガイドラインに沿った薬物療法の実施率を年齢とステロイド投与量のみによる簡易スクリーニングにて評価し、簡易スクリーニングの有効性を検討した。

B. 研究方法

2019年度に当院でステロイドが処方された患者を対象とした。年齢、ステロイドの処方量、骨密度測定歴を抽出し、ステロイド性骨粗鬆症の管理と治療ガイドライン（2014年改訂版）に従ってスコアリングを実施した。まず簡易スクリーニングを行い、3点以上の患者に対して薬物療法の実施率を評価した。次に、骨密度測定結果をふまえて治療率を評価した。

C. 研究結果

評価対象患者は1,709例で、そのうちガイドラインによる治療適応患者1,363例中の854例（62.7%）に対してビスホスホネート薬もしくはデノスマブの投与が行われていた。活性型ビタミンDなどを含む何らかの骨粗鬆症治療薬が投与されていた患者は全体の73.4%であり、年齢別では50歳未満の75.4%、50-64歳の72.2%、65歳以上の73.3%で何らかの骨粗鬆症治療薬が投与されていた。

骨密度測定は182例（10.6%）で実施されていた。年齢別の骨密度測定実施率は50歳未満が7.8%、50-64歳が12.3%、65歳以上が11.3%であった。

骨密度が測定されている患者では全例でガイドラインに沿ったステロイド性骨粗鬆症の薬物療法が実施されていた。

D. 考察

骨密度測定患者は全体の約10%にとどまり、特に50歳未満での実施率が低い傾向を示した。ガイドラインで骨粗鬆症の薬物療法の適応を決めるスコアリング法を考えると、ステロイド投与量が、50歳未満で7.5mg/日未満（ブ

レドニゾロン換算) および 50-64 歳で 5mg/日未満の場合は骨密度測定の結果によって薬物治療推奨の有無が異なる可能性がある。一方、それ以外の群では今回用いた簡易スクリーニングでも、ガイドラインに沿った治療の実施率には影響しない。骨密度が測定されていない患者が多い現状では年齢とステロイド投与量のみでの評価でも一定の有効性が期待できる。例えば、電子カルテなどのコンピューターシステムを利用して、ステロイド性骨粗鬆症の管理について主治医にリマインドするなどの利用法が考えられる。

E. 結論

簡易スクリーニング法はステロイド性骨粗鬆症の要治療患者を抽出するための簡便な方法で、骨密度が測定されていない患者が多い現状では年齢とステロイド投与量のみでの評価でも一定の有効性が期待できるものと思われる。

F. 健康危険情報

(総括研究報告書にまとめて記入)

G. 研究発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし